

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続）
平成29年度事業
杏林大学「日英中トライリンガル育成のための高大接続」第三者評価報告書

【第三者評価委員会開催】

日時：平成30年9月29日（土）14：00～15：30

場所：杏林大学 井の頭キャンパス C棟（本部棟）5階 応接室

評価委員：委員長 平方邦行氏（工学院大学附属中学校・高等学校 校長）

委員 鈴木 栄氏（東京女子大学 教授）

委員 藤井達也氏（埼玉県立和光国際高等学校 教諭）

杏林大学参加者：

大瀧 純一学長、坂本ロビン外国語学部長、ポール・スノードン国際交流センター長、
稲垣大輔高大接続推進室長、青柳貴徳副部長、晝間大郎課次長

各評価委員の第三者評価書と評価委員会での追加の指摘等をもとに、以下に評価の概要を記す。個別の評価については、添付の第三者評価書を参照されたい。

【評価の概要】

5年目を迎えて継続している本事業では、アドバンストプレイスメントの実施とルーブリックの入試での活用が高く評価できる。2020年の入試改革に向けて、いくつかの大学ではアドバンストプレイスメントと称さずに、受験生の囲い込み的に、高校生に単位を認定する授業を実施している場合がある。杏林大学の本事業では、他の3大学との単位互換協定を結び本来的なアドバンストプレイスメント（以下、AP）の実施ができたことは評価できる。つまり関係する高校や大学との組織作りが始まったといえるので、規模を拡大して欲しい。APは当初、高校単位で募集する形にしたが、平成30年度の夏季講座では個人単位で募集して時期的にも多くの高校生の参加があった。今後は、高校・大学へのPR発表会などの発信による組織アプローチと高校生個人へのアプローチの双方が望まれる。

グローバル人材とは「自己変容できる知性」をもった人材のことであり、ブルームの6段階の学習の分類（記憶・理解・応用・分析・評価・創造）にもとづいて、ルーブリックを考えることが必要であろう。9月にテレビ番組の高校生クイズでは、知識量を競うクイズから創造性を競うもの（浮いている多数の風船をどれだけ早く割れるか）になっていて、学校・大学のみならず社会全体がグローバル人材的な知性を求めていることがわかる。

高校生と大学生が参加する各種の学修イベントについては、「参加者の声や成果物の公表」、「課題点の公表」、「継続させること」が重要な要素である。英語一辺倒に傾きがちなか中、中国語研修や中国語カラオケ大会など、他言語の学び・発表力・表現力を試す学修は価値がある。高校生のみならず、ライティングセンターやトライリンガルキャンプ

での大学生が「参加して教える」ことでリーダーとしての素養を身に付けていくことも期待できる。英語プレゼンコンテストに関して、高校生に対する動機づけとして、もう少し敷居の低い「英語に関するなんでも発表会」のような企画も考えられる。

さらに、こうした杏林大学が主導するイベントを、連携高校が自律的に高校主催の行事に発展させていくことが、本事業の高大接続のさらなる展開として期待される。（注：既に各高校ではいろいろな取り組みが実施されており、高校同士の連携も行われている。）

こうした高校生・大学生向けの学修イベントと、教職員向けのFD/SDの参加者には、「認定証」のようなものを発行することで、本事業の認知度も高まるとともに、受領した生徒・学生・教職員への励みとなるであろう。

非常に多彩な事業項目を行っている中で、波及効果となる事業はグローバルという本事業の目的に合致したもののみを行うことで、負担を減らすこともよいのではないかと。

【評価のまとめ】

高大接続の意義は、入試改革と高校・大学の三位一体の改革とされているが、その理由や目的がはっきりしていない部分もある。小・中・（高）の教育が先行して変わる中で、入試と大学が変わらなければならないという理解をしている。今では知識はPCとネットで簡単に手に入れることができるので、情報の応用・分析や創造性の育成が大学に課された教育課題であろう。

平成29年度では、AP（アドバンストプレイズメント）の実施とルーブリックの入試での活用が大きな成果である。また、中間評価でA評価を受けた点も評価できる。その過程で杏林APラウンドテーブルや大学との連携もでき、組織的な展開がみられている。今後、1年半の事業のさらなる展開が期待できるが、補助期間終了後の継続も視野に入れてほしい。

【添付資料】

第三者評価書3通

- ・平方邦行委員長
- ・鈴木 栄委員
- ・藤井達也委員

【評価のための根拠資料】

- ・平成29年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書
- ・日英中トライリンガル育成のための高大接続 事業報告書 平成29年度

以上

(注) アドバンストプレイズメントは、米国 The College Board の登録商標です。

第三者評価書

工学院大学附属中学校・高等学校 校長 平方邦行

【総評】

組織の有効性)「日英中トライリンガル育成のための高大接続」の組織が多層構造になっていて、有機的に循環しているため、自治体—大学—高校などでコンセプトやビジョンを共有できる。また、この理念部分の共有が、ラウンドテーブルなどの議論のみならず、チュータリング、講義、セミナー、インターシップなど具体的な展開によって、強化されている。

アドバンスト・プレイスメントも含め、参加大学、参加高校などが増えてくる組織作りになってきている。

教員の成長)ラウンドテーブルに向けて、会議に参加するメンバー以外のメンバーが資料を準備したり議論をしたりする機会が増えていると推察できる。このような議論やプロダクト制作が、教員間のプロジェクトを自然に形成していくことにつながる。もちろん、セミナーや研修、講義などの活動の事前—実施—事後においても同じようなことが起こる。Growth Mindset が組織内に広がることによって、かかわっている教員が役職があるなしにかかわらず、グローバルリーダーシップを成長させることができたはずである。

生徒の成長)アドバンス・プレイスメント、グローバルな学習イベント、ライティングプラクティスなどに参加し、それをループリックでリフレクションし、自己マスタリーを続ける環境が整った。これにより、1人ひとりが、自分の学びの方法を確立していくことは、大学入学後の探究の活動の基礎になる。そういう意味では、「日英中トライリンガル育成のための高大接続」は、大学に入るための活動ではなく、自分の生き方を決め、そこに集中して学びを行っていく深い学びを行っていくことができる。

キャリアデザインの有効性)したがって、その深い学びは、ループリックが示す通り、学内の授業は活動だけではなく、学外の活動に参画する機会を主体的に Growth Mindset を引き起こすキャリアデザインの側面も有しており、Who are you?という問いを自分の中で繰り返し内省していくことにつながる。グローバル人材という点では、この自己内省というマインドシステムが極めて重要となる。

そして、その大きなカギは、ループリックの活用の浸透にかかっているが、ループリック広報の活動の場も増えている。

【改善すべき点】

主体性・多様性・協働性の足場) セミナー、講義、ライティングなどの生徒のそれぞれの活動のテーマの関連性が可視化されることによって、生徒自身が自らの探究の位置づけがわかる。一つ一つの活動が独立しているだけではなく、関連し合っている複眼思考が、生徒の成長を促すはずである。

また、その際にループリックを毎回活用し、ループリックによる成長軌跡が可視化できる状態をクラウド上あるいは e ポートフォリオのようなオンライン上のシステムなどに反映できることが望ましい。

PDCA サイクルは、年間通じての大きなサイクルと中間のサイクルとその都度行う小さなサイクルの複合構造になることによって、生徒自身はセルフマネジメントを習慣化できる。

ループリックの活用のバージョンアップ) ループリックは個人情報でもあるので、オープンにはできないが、なんらかの統計処理をし、かかわっているメンバーの意識の変容過程を、ラウンドテーブルなどで共有できるようにしておけば、本事業の改善を一目瞭然発見することができる。

活用はセキュリティーなど慎重にしなければならないが、生徒の成長をセルフマネジメントだけに任せるのではなく、本高大接続のコミュニティ全体でもサポートできる体制が、本意でもあるはず。

現状このシステムサポートはないが、チュータリングやピアサポートを組み込んでいることは、このようなサポートが重要かつ必要であることをすでに示唆している。ループリックの活用のバージョンアップは、ICT 時代だからこそできる。

またループリックを、高校の授業、大学の講義でも活用できる部分があるので、活用を浸透させる構想も必要である。これによって、本高大接続が、ディプロマ・ポリシーとしてのみならず、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシーにも首尾一貫する。これによって、高大接続準備教育がより充実するだろう。

海外大学の巻き込み) 中国、インドネシア、シンガポールなどの大学との連携も行い、アジア圏の大学で相互に単位互換ができるアドバンスト・プレイスメントの広がり期待する。今日、講義やセミナー、ライティングなどは、オンラインで相互に学ぶことは簡単にできる。いずれにしても、アドバンスト・プレイスメントの拠点が日本にあることは、グローバルな知識基盤社会の広がりにおいて、日本のプレゼンスを高めることにつながるはずである。

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 29 年度事業実績について

評価者：所属：東京女子大学
氏名：鈴木 栄

総評：

平成 26 年度から始動した「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業は、平成 29 年度からの本格実施を経て、平成 30 年度には体制強化、実施事業についてのラウンドテーブルによる振り返りと意見交換の充実、具体的な事業内容の充実、さらに、本事業の大きな特徴でもあるアドバンスト・プレイスメントの実質的開始の実現と、事業の拡大・充実を実現しているという印象を受けました。

本事業は、様々な活動を大学が地域に提供するという点で大変に意義のある内容となっています。特に、グローバルルーブリックを作成し、AO入試選抜に使用したこと、アドバンスト・プレイスメントの導入については、今後の更なる定着と発展を願います。多くの大学にとっても参考になる試みであると思います。

大学生がチューター、サポーターとして事業に貢献していることは本事業のユニークな特徴となっています。ライティングセンターの行事、ワークショップで「参加して教える」経験をした大学生が地域でリーダーとなり連携行事を自主的に企画することを願います。

大学が地域のリーダーとなり知を提供し、教育支援をおこなうことは大変意義のあることであると思います。報告書を読み、そのように感じました。今後は、「グローバル人材育成」「日英中トライリンガル育成」にさらに特化した様々な活動が紹介されることを期待いたします。

改善すべき点：年度を経て充実した取り組みが展開されています。改善すべき点は特にありませんが、平成 29 年度の実施項目についての感想、質問および、今後の展望について記します。

① 高校側の自律を促す試み

第 11 回杏林 AP ラウンドテーブルにおいて、「連携高校が 14 校ともなると杏林大学側の負担が大変であるので複数の高校の高校生や大学生が交流しながら学べる機会をつくってはどうか」という意見がありましたが、これに同意いたします。現在では、大学側が多くの試みをおこない、地域連携のリーダーシップを取っていますが、数年後には、連携行事で学んだ高校側が自校や、数校連携で、「高校主催の行事」をおこなえるようになれば理想的であると思います。大学側が提供している行事が運営できる高校側のグローバル推進教員ができれば、各学校で独自の行事展開ができるようになり、高校間でも各学校の事業発表についての合同ミーティングをおこなうことができると考えます。大学側としては、グローバル教育推進教

員認定書のようなものを発行し、高校側にリーダーを増やしていくことでさらに裾野が広がります。公立高校では教員の異動がありますが、そうした認定書があることで、異動先の希望や受け入れについて教員と学校の目標が合致した人事がおこなえると思います。

具体的には、プレゼンテーションコンテストや中国語行事を各高校で実施し、その優勝者を集めて大学で最終プレゼンテーション大会を実施することが考えられます。

② 人材育成（大学生を対象として）

① と関連しますが、大学側でも、一連の行事に参加する学生を対象に、グローバル教育推進委員（あるいはチューター委員）として何人かの学生を認定し（認定書を授与する）、地域連携活動を自主的にサポートする、あるいは企画運営をおこなうことを委任してはいかがでしょうか。認定に当たっての評価基準を設定する必要がありますが、行事に参加した回数、外部試験のスコアなどわかりやすい基準で認定をすることも可能かと思います。

形として残る認定資格書は、学生が就職活動をする上でも役に立つことでしょう。

③ アドバンスト・プレイズメントについて

アドバンスト・プレイズメントを3大学との連携で実施開始されていますが、どのように実施したのか、課題は何か、生徒や高校教員の感想は何か、などを是非まとめていただき、多くの大学へ発信していただきたく思います。

④ コンテストの内容について

プレゼンテーションコンテストの実施についての報告書(p.41)で、優秀賞が同じ高校の生徒数名に授与されていることが書かれてあります。もちろん同じ学校から努力して参加した生徒が複数受賞することは、学校、生徒、指導教員にとっても当然の結果であり、誇らしいことではあります。

こうした完成度を競うコンテストは、モチベーションの高い生徒にとってはなによりの機会であると思います。一方、参加したことに意義を見いだすコンテストも自信の無い生徒や、方向性が決まっていな生徒にとっては動機付けとしていい機会です。「英語に関する何でも発表会」のような敷居の低いコンテストを学生主催でおこなってみてはどうでしょうか。

（例：神奈川県立高校英語部会では、現在は残念ながら実施されていませんが、**Operation English** という行事がありました。英語で何を発表してもいい、という主旨でおこなわれ、紙芝居、劇、コマーシャル、ダンスなど各学校で工夫した活動が発表されました。）

⑤ 様々な行事開催について

「中国語カラオケ大会・吹き替え大会」は、中国語学科のゼミナール主催であったと報告書(p.41)にあり、「おもてなしボランティア」は、別のゼミの企画であるとあります(p.56)が、ゼミ主催で行事を企画することは大変意義があることだと思います。教職を目指す学生のゼミであれば更に望ましいと思いますが、そうでなくても大学生が主催で高校生対象の行事を企画することは、行事を継続していく上で効果があると思います。こうしたゼミ主催の企画は、本事業の主旨を考えますと、必ずしも語学のゼミに限られたことではありません。グローバル人材の育成を目指すのですから、語学以外にも国際関係、社会学、心理学、教育学、コミュニケーション学、など様々な学科のゼミから企画が出るとよいと思います。

⑥ 教員研修について

「教員研修の実施」(p.11)として講演が書かれており、対象は大学の教職員となっています。

これはこれで意義があると感じました。一方、高校の教員（ALT も含む）対象の研修として、ライティングセンターでおこなっているセミナーの聴講が可能であれば、自校での実施について考えるよい機会になると思いました。生徒の立場になって参加をすることで教員が学ぶことはたくさんあります。内容も充実したものであるようですので、高校教員の参加を実施されることを願います。

⑦ 連携高校について

数年にわたり高大接続を実施され、スーパーグローバルハイスクール(SGH)に関連する学校を対象としてグローバル人材育成に積極的に取り組む学校との連携は大変に意義のある試みですが、「グローバル人材育成」という明確な目標を明記していないけれども関心のある学校を1校入れてみることで、こうした取り組みの裾野が広がるのではないかと感じました。「グローバル人材育成」は、これから確実にグローバル化が進む社会に出て行く高校生全員に必要な課題であると思うからです。

⑧ 波及効果について

報告書の波及効果(p.51)に様々な活動が紹介されています。高大接続によりインターンシップや職場見学、授業紹介などが生まれて来たようです。対応する大学側も大変であると思いますが、こうして広がることで高校生にとっては大学における学習を知ることができる機会であると思います。IV19, 20, 21, 22 は、高校生が大学の授業や組織を知るという点では、高大接触という本事業の目的に合った効果のある行事であると思います。

ただし、事業の本来の目的は、「日英中トライリンガル育成」を目標としたグローバル人材育成にあるということを考えますと、いじめ防止活動、保健学部の体験授業、キャリアサポートセンターでのインターンシップ経験、職場体験が、グローバル人材育成にどのように繋がるのかわかりにくいと思います。これらの行事は、高校側からの要請で実施されているようですので、高校側が大学に要請をする場合には、申請内容が、「グローバル人材育成」にどのように関わるのか、目的と予想結果を明記していただくようにされてはどうでしょうか。

報告書の記載について

「事業報告書 2017」の p.66 「反転**事業**」は、「反転**授業**」ではないかと思えます。

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 29 年度事業実績

評価者：所属：埼玉県立和光国際高等学校
氏名：藤井達也

総評：

本事業は 5 年目に入り、振り返りと探求を重ねより深みと広がりを増してきたと言える。

例えば、ライティングセンターの運営を例にとってみても、授業との連動を継続してきたことによりその利用が定着してきたことに加え、複数テーマのワークショップや高校生向けの「英語のアカデミック・ライティングセミナー」などが行われ、内容も初期に比べ「ライティング」が重層的に捉えられ、どんな目的で、どんな手段で、どんな内容のものを書くのかを絞りながら、計画、実施されているように感じられる。そしてこのセンターの利用の増加は、授業と連動することの意味を学習者自身が自覚できていることの証左と言えるだろう。

「日英中トライリンガルキャンプ」、「英語キャンプ」に加え、中国語の研修の実施やプレゼンテーションコンテストを新たに高校生にも参加を呼びかけたこと、「中国語カラオケ大会・吹き替え大会」など高校生の参加できるものが増えたことも非常に喜ばしい進展である。表層的な「英語一辺倒」の様相を帯びる昨今、これら他の言語の学び、発表力、表現力に視点をむけたものの実施は価値のあるものと考えられる。

そういった取り組みの蓄積が高大連携事業にも生かされ、高校側のニーズにより応じた内容を提供できているように思われる。参加した高校生の感想にも、新しいものに触れたうれしさ、自分の認識が変わる喜び、普段出合いがたい年齢層や留学生との交流による気づき、日頃の学びに対する振り返りなどが率直に現れている。

AP ラウンドテーブルを継続的に実施することによって参加校が増えただけでなく、意見交換で出たことをフィードバックすることにより本事業の深化と拡大につながっている。

教務的制度の構築により、高校の夏季及び春季休業中に「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」が設定されたことは大きな前進である。現在の日本の高校生の生活では学期中に参加することは難しかったのだが、これにより参加しやすくなり、AP 制度の認知・定着にもつながりやすくなるのではないかと思われる。おそらく外部のものがいほど簡単ではなく、大小様々なクリアすべき問題もあったと推測されるだけにぜひ今後の参加の増加につなげたいものである。また、講義の内容も多方面にわたっており、今後の拡充にも期待が持てるものである。

本年度において大きな進展の一つは、アドバンスト・プレイズメントの大学間単位互換協定を複数の大学で締結したことである。履修登録・単位修得の実績があったことも喜ばしいが、これにより得た単位がより多くの大学で単位認定されることにつながる。高校の生徒にとってより有益なものとなっていく。さらに協定大学が増え、AP 制度の社会的認知が進み本来のあり方に大い

に近づいていくことが期待される。

また、外国語学部の入試において、ルーブリックが入学試験の一部として導入されたことも大きな成果である。高校生の学校外の学び、行動の評価することにより、自主的主体的な学びを評価できる。ルーブリックを用いた評価の定着にもつながる。志願者、合格者の増加は今後に十分期待できると思われる。

全体を振り返ってみると本事業では、AP ラウンドテーブル、ライティングセンター、アドバンストプレイズメントなどの事業の柱から生まれる具体的な実施内容が相乗的な効果を生んで全体的に大きな進展を見せている。それも真摯にフィードバックを行っていることから得られたものと評価できる。相乗的な効果という点からは種々の取り組みが大学生にも刺激となり発見や気づきを引き起こしているのではないかと思う。

新学習指導要領に指摘されるまでもなく、主体的かつ対話的な学び・思考力、表現力、自ら学びに向かう力・学習者自らが自身の学びのカリキュラムを構築する力をいかにはぐくむべきか議論されて久しいが、教育現場ではなかなか大きな変化に至っていない。以前も述べたことだが、本事業の役割は大きい。

老婆心ながら事業の初期に心配していた、他の多くの事業例で見られるようなその事業が展開された時は精力的に実施するが事業が終わると廃れてしまう「ポスト〇〇現象」のようなものは、本事業では起こらず、ますます深みと広がりが増すことが期待される。真摯な、継続的な取り組みに敬意を表します。知の拠点として地に根付く事業となることを期待します。

改善すべき点：

特に改善すべき点は見あたりません。今までも述べてきたようにぜひ持続的可能な形で本事業を継続し発展させていっていただきたいと思います。今後の運営に参考にもしなれば幸いという意味でいくつか述べさせていただきます。

1、「AP ラウンドテーブル」での高校の先生の意見を取り入れ、中国語においては堅いものではなく、「中国語カラオケ大会・吹き替え大会」を実施したということですが、このこと事態はとても良いことだと思います。カラオケの他に考えられるものとして、例えば、簡単なフレーズだけ（フレーズは主催者側で指定、限定してもよい）を使った、スキットをつくってグループで演じてもらう。あるいは、「私の近くに見える中国」というテーマで、身近なところに見える「中国」を写真に撮り、その写真を見せながら自分で気がついたことを日本語で発表する。（あるいは英語でもいい）。レベルの高い中国語を使わなくても異文化や自分の生活している社会に対する「気づき」を発表しあえる場になるかもしれません。

2、ラウンドテーブルの中で出たそうですがシンポジウムの開催については、高校と大学の連携という角度も良いのですが、AP の大学間単位互換協定を広く知ってもらう、協定大学を増やすという目的を持つという意味で、多くの大学に来てもらうという意義も大きいかもしれません。検討する価値はあると思います。協定大学ある程度以上の数になれば AP の社会的認知は大きく跳ね上がることになると思われます。

3、すべての行事ではなくてかまわないので、さまざまな行事における高校生の参加者の成果物や参加者の声が目にとできると良いと思います。特にプロジェクトベースラーニングのようなものは ICT の活用も当然含まれますので、ネット上で見られるようにすることも容易でしょう。参

加者は達成感も持てますし、インタラクティブな意見交換が生まれるかもしれませんし、その後の継続的な探求につなげられたりするかもしれません。

まとまりのない感想じみたものになってしまい恐縮ですが、少しでもお役に立てば幸いです。